フィールドで考える

発掘は誰のため

松本雄一（まつもと ゆういち）
民博 機関研究員

ペルー高地の神殿

二〇〇五年七月、ペルー中央高地に位置するアヤクーチョ県に、形成期（紀元前三〇〇〇―五〇年）の巨大な神殿があるという情報をえたわたしは、バスを乗り継いでビルカスワマンという町へと向かった。カンパナユック・ルミという名のその遺跡は、町のすぐそばにあり、この一帯の同時代の神殿としては最大規模のものであろうと容易に想像がついた。当時大学院生で博士論文を書くためのフィールドを探していたわたしは、誰も調査したことのない無名の神殿が存在していることに興奮し、発掘調査をおこなうことを決意したのである。その時には、高地の抜けるような青空とインカ帝国時代の石積みがそこかしこにみられる美しい景観にもすっかり魅了されてしまっていた。

ペルー高地に位置するビルカスワマンの町

対立する行政と地域社会

二〇〇七年一〇月、何とか研究費を獲得しペルー文化庁から調査許可をえたわたしは、この大神殿を乏しい予算でどのように発掘するかということで頭をいっぱいにして町へと辿り着いた。まずは遺跡近くの共同体（コムニダ）のリーダーを訪れて調査の目的を説明し、協力を要請した。和やかな会談であったが、話の流れで文化庁の発掘許可証を提示した途端、拒絶に近い激しい反応が返ってきた。その時の「ここでは文化庁は何の権利ももたないし、役場は共同体経済のごく一部とかかわっているに過ぎない」ということばで行政と共同体の関係が難しいものであることが察せられたが、発掘のことに気を取られていたわたしはあまり気に留めなかった。だが、このことをわたしはすぐに後悔することとなる。

地元の学生ボランティアの手を借りた発掘が軌道に乗り始めた二〇〇七年一二月のある朝、以前話したリーダーが村人を一五人ほど引き連れてわたしを訪ねてきた。みな斧やら鍬やらを携えて物々しい雰囲気である。彼は大声で、「発掘に関係する仕事が公平に分配されておらず、共同体として見過ごすことはできない」と言う。調査が極めて小規模なもので多くの人間を雇うことが不可能であることを説明してもまったく相手にされない。「外国人が何の権利があって先祖から受け継いだ土地を掘り返すのだ」などという声も聞こえる。書類を見せるように求められたので再び文化庁による発掘許可証を示すと、リーダーがその書類を指さしながら「国の法律はここでは関係ない。国は共同体に対して何の権利ももっていない。外の人間は信用できない。ここで何かをするなら我々の要求を呑んでもらう」と宣言した。さらに続いて共同体を賛美しその国家行政からの独立性を主張する演説が始まり、わたしが何かを言える雰囲気ではなくなってしまった。幸い地元出身の学生が調査助手として参加しており、彼のとりなしで村人は引き上げてくれた。このとき、わたし自身はどう振舞うべきであったのか今でも考えることがある。

発掘調査は学生と村人との共同作業である

地域の過去と遺跡の発掘

結局のところ、頻繁に発掘成果の説明会をおこない、近隣の学校からの見学を積極的に受けいれることで、ある程度地域の理解をえることができた。また、その過程で共同体の人びとがなぜ文化庁の書類に激しい反応を示し、我々の調査に厳しい目を向けていたのかもわかるようになってきたのである。ビルカスワマンは八〇年代のテロリズムの被害をもっとも強く受けた地域のひとつであった。多くの悲劇が起こり、その影響は今なお消えてはいない。例えば、この時期に男の働き手を失った家族が共同体のなかに数多く存在している。我々の調査が不平等だと非難された理由のひとつは、発掘作業員として男性しか雇わなかった点であった。むしろ男の働き手を失った家庭にこそ仕事が必要だったのである。

町役場で調査の説明会を開く

テロリストと軍の衝突がもっとも激しかった八〇年代後半、この地域の人びとは軍とテロリストの双方から疑われ、激しい暴力にさらされたという。その結果ビルカスワマンの共同体の多くは外部の人間をまったく信用しなくなってしまった。そんななかに初めて外国人が入って調査をおこなう、しかも国の文化庁が許可したとなれば反発は必然であった。

考古学調査と現代社会

このような経験を通じて、「考古学調査は研究者だけのものではない」という当然のことを改めて考えさせられた。学術調査においても、必然的に学問の枠を超えた多くの人びとがかかわることとなるため、地域の政治状況と無縁ではいられない。我々外国人研究者は当然ながらペルーの法律にしたがって調査をしなければならないが、それが原因で地域社会からの反発をうける場合があるのも事実である。一方で考古学調査は、国と地域双方の協力がなくては絶対に成り立たない。両者のあいだで研究者はどのように行動するべきか、今後とも逃げずに考え続けなければならないだろう。